

しきこそ、ないがしろなれいみじき心をおこしてまうでたるに川の音などのおそろしきにくればしをのぼりこうじて、いつしか佛の御かほをおがみ奉らんと、つばねにいそぎ入たるにみの虫のやうなるもの、あやしききぬきたるがいとにくきたちぬかづきたるは、をしたふしつべきこ、ちこそすれ、

〔菅笠日記上〕むかひはすなはち初瀬の里なれば人やどす家に立入て、物くひなどしてやすむ。中略さて御堂にまゐらんとていでたつ、まづ門を入れてくれはしをのぼらんとする所に、たがことかはゑらねど、だうみやうの塔とて、右の方にあり。中略かくて御堂にまゐりつきたるに。中略已の時とて、貝ふき鐘つくなり、むかし清少納言がまうでし時も、俄にこの貝を吹いでつるに、おどろきたるよしかきおける、思ひ出られて、そのかみの面影も見るやうなり、鐘はやがてみだうのかたはら、今のはりこしくれはしの上なる樓になんか、れりける、

名も高くはつせの寺のかねてよりき、こし音を今ぞ聞ける

〔豊前紀行〕宇佐の街より西の大鳥居を入て、寄る藻川に懸れる吳橋を渡る、此橋長きこと十三間許、上に甍有て恰も家の如し、

〔伊呂波字類抄國郡〕唐橋

〔三代實錄陽成〕元慶三年九月廿五日壬子是夜鴨河辛橋火

〔玉勝間十三〕鴨河の韓橋

此橋は鴨川のいづこばかりにか在けん

〔書言字考節用集二乾坤〕勢多韓橋セカイクン  
〔又作〕カヨウ

〔本朝世紀〕天慶二年五月廿七日戊辰、中納言實賴卿師口卿已下諸卿并少納言、外記、史生使部已下相率、出自陽明門、出河原賀茂下社、至于韓橋北邊、有巡檢事、